

<翻訳と解題>

キケロー著『弁論家の最高種について』 (Cicero, *De optimo genere oratorum*) —解説と全訳および注釈—

Cicero's *De optimo genere oratorum*

—An introduction and Japanese translation with commentary—

高畑 時子

(日本学術振興会特別研究員 RPD)

Tokiko TAKAHATA

【凡例】

翻訳の底本は、Wilkins 校訂のテキストとする (Wilkins, A. S. ed. (1989), *Brutus; Orator; De optimo genere oratorum; Partitiones oratoriae; Topica, M. Tulli Ciceronis; recognovit brevique adnotatione critica instruxit, Scriptorum classicorum bibliotheca Oxoniensis. Rhetorica; tomus 2*, Oxford: Oxford University Press)。

また、引用作品の表記は、Glare, P. G. W. (1992), *Oxford Latin Dictionary*, Oxford: Oxford University Press (2d ed.) と Liddell, H.G. and Scott, R. (1996), *A Greek-English Lexicon*, Oxford: Oxford University Press (9th ed. with revised supplement) に記載されている略語表に従う。

固有名詞の表記は、基本的にラテン語表記に従うが、ギリシア人名など、ギリシア語表記の方が一般に知られている名称についてはギリシア語表記を採用する。その場合、初出の語にのみ括弧をつけてラテン語表記も記載する。

解 説

マルクス・トゥッリウス・キケロー (Marcus Tullius Cicero, 前 106～前 43) 著『弁論家の最高種について』 (*De optimo genere oratorum*) は、アISKINEES (ラテン語でアエスキネース) の弁論『クテーシポーン反駁』とそれに対して行われたデーモステネースの弁論『冠について (クテーシポーン弁護)』をキケローが翻訳した (cf. *Opt. Gen.* 14 および 23) 際の序文である。これらの翻訳作品を通じて、キケローは最もすぐれた真のアッティカ風の弁論とはどのようなものであったか、そしてローマの弁論はどのようなべきかをも訴えるつもりであった。しかし、残念ながらそれらの翻訳作品は現存していない。

本作品が執筆されたのは、キケローが 60 歳頃の前 46 年で、亡くなる数年前であった。

当時、キケローは公的生活、私生活のどちらにおいても苦境に陥っていた。前49年から前45年まで続いたローマ内戦で、グナエウス・ポンペイウスおよび元老院派とガイウス・ユリウス・カエサル派が対戦したが、前48年から始まったパルサロス（ラテン語発音ではパルサルス、Pharsalus）の戦いでカエサル派が優位に立った。その際、ポンペイウス派側に付いていたキケローは降伏し、前47年にカエサルから恩赦を受けた。以来、キケローはかつての華々しい政治の舞台から身を引き、執筆活動に専念していた。他方、当時は私生活においても不幸に見舞われ、前46年に妻テレンティア（Terentia）と離婚した。しかもキケローは離婚後、若いプーブリリア（Publilia）と再婚するが¹⁾、45年2月、再婚後間もなく、娘のトゥッリア（Tullia）を亡くしてしまう。キケローは娘の死をたいそう嘆き悲しみ、元よりキケローが娘を可愛がるのに嫉妬していたプーブリリアは、娘の死を喜んだため、キケローは娘の死後一年が経たないうちに、この若い後妻とも離婚する。こうして、キケローは家族を一気に失ってしまった。これらの出来事は当然、キケローに一方ならぬ衝撃を与えた²⁾。

この頃、キケローの主な関心は修辞学に向けられた。前46年の初頭に『ブルートゥス』（*Brutus*）が出版され、その年の夏、『弁論家』（*Orator*）が執筆された。本作品が書かれた時期については、意見が分かれている。一つは前46年に、『ブルートゥス』（*Brutus*）の出版後から『弁論家』（*Orator*）を執筆中の間に書かれたという説と（Hubbell, p.349; Hendrickson, p.122）、『ブルートゥス』と『弁論家』に続いて書かれたという説がある（Nüßlein, p.389; Häfner, p.5; Diehle, p. 304 以下）。『ブルートゥス』が9月頃に書き終わられたという説もあり（Mitchell, p.277）、これは後者の意見と同じである。しかし少なくとも、前46年に本作品が書かれたということについては研究者間で一致している。

『ブルートゥス』はローマの弁論家の歴史について書かれた対話篇である。個々の弁論家を時代順に扱い、それらの弁論が発展した時期ごとに分類している。そして、いかにしてローマで演説が発展していき、キケローの時代、そしてキケロー自身で頂点を迎えたかについて語られている。この『ブルートゥス』では、アッティカ（ギリシア語：アッティケー）風を支持する当時のローマの弁論家が持っていた考えについて、キケロー自身の考えが『弁論家』におけるよりも詳しく語られている。この作品をキケローが書いたのは、自身が正しいと思う弁論スタイルを論証し、当時のアッティカ風を支持するローマの弁論家の考えに疑問を呈するためであった。彼らは、初期のアッティカの弁論家の簡潔さと素朴さに固執していたからである。デーモステネースは、豊潤な話し方から簡潔な話し方まで、どんな弁論スタイルでも自在に操ることができたが、キケローにとっては（少なくとも『ブルートゥス』と本作品では）世代を超えた最も偉大な弁論家であった。

『弁論家』は、ブルートゥス（Marcus Iunius Brutus）への手紙という形式を取って書かれている。ブルートゥスの求めに応じ、当時10年間に渡って論争されてきたアッティカ派とアジア（ラテン語：アジア）派の弁論家の対立に関して、キケローが自身の立場を示した作品である。

アッティカ派とは、アテーナイ（ラテン語でアテーナエ）人の純粋なアッティカ風の話し方を信奉する者である。より狭義の意味では、前1世紀半ばに修辞学における新古典主義を興した運動の担い手である。彼らはかつてアテーナイで栄えた、簡潔で実用的な、機知に富みかつ洗練された典雅な表現を模範とした。キケローの共和政末期の時代には、ギリシアの弁論の中心地はアテーナイではなく、主に小アジア沿岸となっていた。そして、そこから迎えたギリシア人弁論教師により、ローマで弁論教育が行われた。その結果、ローマではアッティカ風よりもアジア風の文体を支持する弁論家が優勢となった。小アジアで発達したアジア風の文体とは、奇怪なまでに饒舌、文飾過多であり、パトスに満ちて芝居がかった仰々しい言い回しにより華麗さを誇示するもので、実際の弁論で援用されるというよりはむしろ「聞いて楽しむ技芸³⁾」にすぎなかった。この「病的」なアジア風文体は、特にリュウシアースの「健全」(*Brut.* 51; cf. *Or.* 29) なアッティカ風文体と対比された。

クインティリアヌスは、キケローがその同時代の人々からアジア風と評されてその文体が大言壮語で冗漫、繰り返しが多く、散漫であるなどと批判されてきたことを伝えているが (*Quint. Inst.* 12,10,12~14)、キケロー自身はアジア派を「リズムを壊して切れ切れにする下等な種」と酷評し (*Or.* 230; cf. *Brut.* 51)、自身はアジア風だとは思っていない。かといってキケロー自身はアッティカ風弁論を無条件に信奉していたわけではなく、アッティカ風は簡潔過ぎると思え、アッティカ派の純粋主義を批判する。よって、キケローが支持したのは両者の中間にある「中間体」(*genus medium*) である。

キケローは『弁論家』では本作品からさらに前進し、誰にも体现できず、どこにも見出しえないような理想の、完全な弁論家像を探求し、それに必要な条件を考察している。『弁論家』において、特にデーモステネースがそれに最も近い存在であると示唆している (*Or.* 90)。が、デーモステネースが理想そのものというわけでもない (*Or.* 104. この考えはまだ『弁論家の最高種について』には表れていない)。デーモステネースはあらゆる文体を駆使することができ、彼こそが真のアッティカ風弁論家である。それに反し、アッティカ派を名乗るローマの弁論家は、簡潔な文体が特徴のリュウシアースや難解な文体で有名なトゥーキューディデースのような作家を「アッティカ風」と呼んでいる⁴⁾。キケローはデーモステネースを引き合いに出して彼らを批判した。そして、盟友で政治的同志でもあるブルートゥスを彼らの偏った考えから離れて自身の考えに引き入れようとした。

この『ブルートゥス』と『弁論家』の内容から『弁論家の最高種について』の執筆時期が予測される。『弁論家の最高種について』は『ブルートゥス』で述べられている弁論家の歴史に関する知識を含み、『弁論家』は『弁論家の最高種について』において最初に扱われた完全な弁論家の思想を、さらに発展させている。よって、『ブルートゥス』、『弁論家の最高種について』、『弁論家』の順に書かれたという説がもっともらしいと推測される。

『弁論家の最高種について』について、Hendrickson (p.109) は『ブルートゥス』や『弁論家』というより大きな作品を生み出す過程を観察する上で興味深い作品であると思える。なぜならプラトーンのイデア思想にも通じる理想の弁論家という概念は、『弁論家』以前

の修辞学著作にはまだ出現していないからである (同上、p.112)。従って、本作品を執筆中にキケローがこの自身の根本理念に関する着想を得た可能性が高い。このように、本来はキケローの修辞学を学ぶ上で重要な作品の一つであるが、アスコニーウス (Quintus Asconius Pedianus, 前9年頃～76年頃) の時代からすでにキケローの修辞学を学ぶ学生に重視されていなかった (その傾向は現在まで続くが)。本作品がようやく世に知られるようになったのは、教父ヒエローニウムス (Hieronymus, 348年～420年頃) の書簡57番『翻訳の最高種について』 (*De optimo genere interpretandi, Epistula 57*, 395年) を通じてである。この作品で、ヒエローニウムスは自身の翻訳の意図と翻訳法を正当化している。訳者は単語と単語を置き換える逐語訳ではなく、文の意味を捉えねばならない、と述べる。その際、ヒエローニウムスは、『翻訳の最高種について』という作品名からも看取されるように、キケローを最も拠り所にした。この『翻訳の最高種について』では、本作品の13節以下と23節が引用されている。本作品の題が“optimum genus oratorum”であって“interpretandi”ではないことについては、キケローが本作品では翻訳論は簡潔に (“in nuce”) 論じたことからだとヒエローニウムス以来、解釈されている (cf. Nüßlein, p.390)。

本作品には入念に仕上げられた『ブルートゥス』や『弁論家』にはほとんど見られない未熟さや時折、文体の不明瞭さが見られる。それは、写本⁵⁾に起因するとみられる。本作品には二つの写本がある。一つは、11世紀のSangallensis 818 (G) と Parisinus 7347 (P) の二つの写本から作られた写本で、もう一つは、15世紀の数多くの写本から作られた写本 (15世紀の一連の写本) である。

本作品の問題は、まず、本作品がキケローの真作であるかどうか疑われていることである。また、キケローが実際にアイスキネースとデーモステネースの弁論の翻訳を行ない、公表したか、という問題もある。以上の問題については、解釈が分かれている。Häfnerは、文体も内容もまごうかたなくキケロー自身のもので、キケローが本作品の著者であると言明し、翻訳は実際にはなされたが、後代、アスコニーウスなどに偽作と疑われたため、散逸してしまったと考える (p.4以下)。Kroll (p.1101～1102) は「キケローが翻訳をしたかははっきり言えない。…だが、本作品の真偽性はもちろん疑う余地がない」と言う。それに対し、Diehleは、キケローの作品であることに強く異論を唱え (p.308)、翻訳も公表されなかったが、これは現代の意味での「偽作」というわけではなく、修辞学校で生み出されたものだと考える (p.314)。

Hendrickson (p.109以下) と Peterson (p.372) および Hubbell (p.350) はこれらの翻訳作品は公表されたことがなく、翻訳自体、おそらく一度も行われなかったと考える。Häfner (p.5) は、翻訳が完成されたかどうかは不明、少なくともキケローの生前に出版はされなかったとしており、本作品は全く出版されなかったと考える Hubbell とは意見が異なる。それに反し、Nüßlein (p.389) は、キケローがデーモステネースの『冠について』を翻訳したことは確かであるという。それは、当時ローマにいたアッティカ派弁論家の、初期のアッティカ派の簡素で稚拙、未熟な弁論の種 (tenue dicendi genus) だけがアッティカ風であるという偏った考えに反論するためだという。つまり、キケローによると、完全な弁論家 (orator

perfectus) とは (デーモステネースがそれに最も近いのであるが、彼ですらその理想を体現し得ていない) 荘重体・簡素体・中間体の、三文体の全てで話すことができなければならないからである (cf. *Or.* 100~101 および 104)。しかし、本作品が現存する限り、少なくともキケローは翻訳を予定か意図して、その序文を書いたことは確かである。

本作品の内容構成は、以下の通りである。

1 節~6 節： 詩人には様々な種があり、それぞれの種が独自の個性を持つが、それとは異なり、弁論家の種はただ一つである。それぞれの弁論家の相違は、種にあるのではなく、程度の差にある。

弁論家は発想、構成、文彩、記憶、話し方 (弁論家の五大義務) に留意すべきである。

7 節~13 節前半： アテーナイのアッティカ風の弁論家は、以上の弁論家の五大義務を体得し、弁論術の最大の目標に到達した。キケローは華美で饒舌な弁論を行うアジア派ではなく、アッティカ派を模範とすべきであると考え。ただし、ローマの新アッティカ派弁論家のようにただ単に簡潔な文体を是とするのではなく、簡潔であっても華麗さは失わず、正確に語ることでこそ真のアッティカ派弁論家であると考え。

13 節後半~17 節： キケローは、アテーナイにかつていたデーモステネースとアイスキネースが弁論家の真の模範であると考え。このことを示すため、トゥーキューディデース、プラトーンやイーソクラテースではなく、両者の弁論を訳した。アッティカ風に語ることはすなわち上手に話すことである。

18 節： キケローが両者の弁論を訳したのは、翻訳することにより最良の弁論家の特質が明らかになるからである。キケローは同時に、この翻訳作業に対する批判に対して異議を唱え、キケローが翻訳したことを正当化する。(おそらくローマの翻訳作品がギリシアのオリジナル詩を凌ぐほどの出来であるので、自身もギリシアの著名人の弁論を翻訳することで、それらに劣らない新たなラテン語ならではの作品を作り出したい、ということを暗に主張している。)

19 節~23 節： キケローは、デーモステネースとアイスキネースによる互いに対する弁論の内容を紹介し、その歴史的背景を説明する。デーモステネースは私費で町の防壁を修繕した。この慈善活動に、友人で弁論家のクテーシポーンがたとえ法律違反となっても栄冠を授けようと提案したが、これが政治問題となった。デーモステネースの政敵アイスキネースは、クテーシポーンを不法な提案を行ったとして告訴し、デーモステネースの誠実な慈善事業と言われた行為に疑問を呈した (前 330 年)。あらゆる人々がこの二人の偉大な弁論家の弁論を聞きに来た⁶⁾。キケローは、二人の弁論を翻訳する際の注意点および自身が理想とする翻訳の方法を述べることで、これらの翻訳の序論 (つまり、本作品) を締めくくる。

以下、訳出に際し、なるべく原文から離れないよう、あえてできる限り逐語訳した。また、() 内の文は、原文にはない訳者の追加説明である。また、原文テキストに [] の付いた箇所は、訳文にも [] を付けた。

キケロー著『弁論家の最高種について』全訳

- 1 弁論家の種類は、詩人の種類と同じ位あると言われている。が、それは間違いである。なぜなら、後者の種類は多種多様だからである。というのも、悲劇、喜劇、叙事詩、叙情詩⁷⁾、ディテュラムボス詩⁸⁾ は、[ローマ人よりも] (ギリシア人に) より多く扱われてきたものであるが、それぞれ個性を持ち、他の種の詩とは異なるからである。それゆえ、悲劇においては喜劇的な要素は欠点となり、逆に、喜劇に悲劇的な要素が入ると見苦しくなる。それ以外の種類の詩には、それぞれに固有のある一定の音調と、
- 2 識者たちには知られた口調がある。一方、弁論家については、誰かが (詩人よりももっと) 多くの種類の弁論家を列挙するとしよう。例えば、荘重、重厚で、豊かな表現をする弁論家を、他方、簡素、平明で、短く話す弁論家を、さらに、両者の中間に位置し、いわば中庸と見なされている弁論家らを挙げてみよう⁹⁾。すると、それらの個々の弁論家については何か (相違を) 言えることがあるが、それぞれの弁論家の話法¹⁰⁾ については言えることはほとんどないのである。というのも、話法に関しては「何が理想的な話法であるか」が問われるが、人間についてはただ、あるがままに「どんな人間であるか」が語られるからである。もし一般にそう思われるなら、エンニウス¹¹⁾ は最高の叙事詩人であり、パークウィウス¹²⁾ は最高の悲劇詩人、おそらくカエキリウス¹³⁾ も
- 3 最高の喜劇詩人であると言えよう。私は弁論家を種類で分けるつもりはない。あくまでも完全な弁論家を探求しているからだ。だが、完全な弁論家の種類はただ一つである。この完全な弁論家の種から隔たった者たちは、テレンティウス¹⁴⁾ がアッキウス¹⁵⁾ と異なるように種類において異なるのではなく、同じ種類にあっても同等ではない、ということである。最高の弁論家とは、言論によって聴衆の心を教化もし、喜ばせもし、感動させもするのである。聴衆を教化することは弁論家の義務であり、喜ばせること
- 4 は名誉ある仕事であり、感動させることは必要不可欠な要素である。これをある者が他の者よりも上手にできることは認めねばならないが、その違いは弁論家の種類にあるのではなく、程度にある。弁論家の最高種はただ一つしかないが、その次に良い種は、弁論家の最高種に最も近いものとなる。このことから、最高の弁論家に最も似ていない種が、最も下等の種となることは明らかである。というのも、雄弁は言葉と思想 (意味内容) から成り立っているので、明瞭で正確に—それは「ラテン語法で」¹⁶⁾ という意味そのものであるが—話すことを達成するだけでなく、適切な言葉選びも翻訳者の洗練も追及せねばならないのである。適切な言葉のうち、最もと言ってよいほど洗練され

- た言葉を選ぶべきであるし、翻訳する際には(原文の意味との)類似性を保ち、(原文
- 5 から)かけ離れた語は控え目に用いるべきである。他方、私が上で述べた賞賛演説と同じ位多くの思想の種類がある。聴き手を教化するには明敏な思想内容の種が、楽しませるにはいわゆる機知に豊んだ思想が、感動させるには重々しい思想の種がある。また、リズムと流暢さという二つの効果を生み出す語の配置もある。そして、思考にはそれ自身の配置法と事物の証明に適した順序がある。これら全ての基礎は記憶である。
- 6 それは[建物の]基礎部分のごとくであり、口演は光を与える。これら全ての点において最高である者が最も完成された弁論家であろう。中位である者が中庸の弁論家であり、最低である者が最下位の弁論家であろう。しかし彼ら全員が弁論家と呼ばれていた。それは画家がたとえ下手でも画家と呼ばれるごとくである。彼らは互いに種類の点で異なっているのではなく、能力の点で異なっているからである。そのため、デーモステネース¹⁷⁾に自身が似るのを望まない弁論家は誰もいない。だがメナンドロス(ラテン語:メナデル)¹⁸⁾はホメーロス(ホメールス)¹⁹⁾に似るのを望まなかった。なぜなら彼の(作家としての)種がホメーロスと異なっていたからである。しかしこのことは弁論家の場合には当てはまらない。というのも重厚さを追求する余り簡潔さを避けたり、逆に華麗な文体よりも明快さを求める者がいるなら、その者は(弁論家の)種という観点から見れば許容範囲であるが、最高種の弁論家では決してない。もし、あらゆる美德を持つということが最高の弁論家(としての条件)であるのなら。
- 7 私はこの序論を、この作品の主題が必要とするよりも簡潔に述べてきたが、私が意図する論題については多くの言葉で語る必要はないだろう。というのも、それがどのようなものか我々が探し求めている弁論の種類は、ただ一つだからである。その弁論の種は、アテーナイで栄えていたものである。これを行ったアッティカの弁論家たちの名声は知られているが、彼らの能力そのものは知られていない。アッティカの弁論家たちには欠点など何も見当たらないと考えた者は沢山いたが、彼らには多くの賞賛すべき点があると考えた者は少ししかいなかったからである。もし思想(内容)に何か不合理な、あるいは不適當な、あるいは明確でない、あるいは何かつまらない点がある場合、その思想には欠陥があることになる。またもし言葉に下品で、卑しく、不適切で、粗野で、こじつけ的な部分があれば、その言葉にも欠陥があることになる。これ
- 8 ら全ての欠点を、アッティカ風弁論家と見なされた人々やアッティカ風に話す人々のほとんど全員が避けてきた。その限りで能力を発揮した者は、健全ではあるが、とにかく飾り気がなく味気ないと見なされるかもしれない。それは、回廊を散歩することはできるが、オリュンピア競技祭で栄冠を目指そうとしない格闘技訓練所の教師²⁰⁾のごとくである。そのような者たち²¹⁾は、身体的欠陥は無いばかりか、自らの良好な健康状態に単に満足しているのではなく、体力、筋力、血気、ある種の心地よい(美しく焼けた)肌の色を得ようと努めるのである。できることなら我々は彼らを模倣しよう。もし模倣できないなら、アジアが多数生み出した、ごてごてした多弁が欠点となっている者たちよりも、アッティカ風作家に特有の、穢れのない健全さを持つ者を我々は目

- 9 指そう。それを我々がもし実行するなら、ただ単にそれを追求するだけではなく、できることなら何か非常に大きな偉業、すなわちリュージアース²²⁾と、とりわけその簡素さを模倣しよう。リュージアース (の文体) は比較的荘重な箇所も多くあるが、彼が書いたのはほとんどが私的訴訟で、しかもこれらは他人のために書いた小さな事件を扱った訴訟であったので、(その文体は) 貧弱に見えるが、彼自身、小規模な訴訟の種に合うよう (自身の文体を) 磨き上げたのはわざとであった。もし文体を豊かにしたいのにそれができない者がいたら、その者はいち弁論家としては見なされうるが、あくまでも低いレベルの弁論家の一人でしかないだろう。だがどんなに偉大な弁論家であっても、そのような種の訴訟では、リュージアースのようなやり方で語らざるを得ない。
- 10 つまり、デーモステネースは簡素な文体で語ることができるのは確かであるが、リュージアースの方はおそらく荘重な文体では語ることができないであろう。だが、もし『ミロー²³⁾ 弁護』にて、軍隊がフォルム (公共広場) とその周辺にある全ての神殿に配備されていたにもかかわらず、たった一人の裁判官に向かって民事裁判の弁論を行う時と同じような話し方で、ミローを弁護するのがふさわしかったと考える者がいれば、その者は²⁴⁾ 雄弁の力を事物の本質ではなく、彼自身の (限られた²⁵⁾) 能力によって判断しているにすぎない。従って、自分はアッティカ風に語っている、と主張する者がいるかと思えば我々ローマ人の誰もアッティカ風に話す者はいないと言う者²⁶⁾ がいるなど、多様な人々の主張がすでに広まってしまっているので、我々は後者のグループの意見を扱わないでおこう。なぜなら、事実が十分彼らに答えを出しているし、彼らは訴訟の場へ出るよう依頼されてもおらず、たとえ頼まれることがあったとしても、笑われるだけであろうからである。もし笑われたら²⁷⁾、むしろ、まさにそのことがアッティカ人の徴となろう。だが、アッティカ風に語ることを望まないけれども、洗練された耳と聡明な判断力を持ち合わせている者であれば、たとえ自身が弁論家ではないと公言する者であっても、(訴訟の場へ出るよう依頼されることがある。) それは、あたかも絵画を描く技術はないが、絵画の鑑定力には長けている者が、絵画を鑑定するよう依頼されるがごとくである。他方、そういった者たちが聴衆のあら捜しに知性を感じ、崇高で壮麗なものに喜びを感じないなら、彼らには簡素で洗練されたものを望み、荘重で、飾られたものを軽視すると言わせておこう。だが、簡素に話す弁論家だけがアッティカ風に、つまり平明で正確に語ることは彼らには言わせないでおこう。華麗で、詞藻を凝らして豊かでもあり、同じ純正さを持つ文体こそが、アッティカ人 (弁論家) の徴なのである。どうだろうか。我々の弁論がただ許容できるというのと、賞賛に値するのというのではどちらが望ましいか、疑う余地などないのではないか。我々はただ単に、何がアッティカ風かを探求しているのではなく、
- 13 最も良く語る方法を探求しているからである。このことから分かるのは、ギリシアの弁論家のうち最も卓越した者たちとは、アテーナイにかついていた者たちであり、彼らのうちデーモステネースが文句なしにその頂点におり、デーモステネースを模倣する者はアッティカ風で、かつ最良に語っているということである。その結果、アッティ

カ人は我々の手本とされてきたので、良く語ることとはアッティカ風に語るということになる。

- 弁論の種とはどのようなものであるか、という問いには大きな誤りがあるので、学
- 14 生にとっては有益であるが、私自身にはどうしても必要というわけでもない仕事に、私は取り掛かるべきであると考えた。アッティカ出身の最も雄弁な二人であるアイスキネース²⁸⁾とデーモステネースの、互いに対して述べられた、非常に卓越した弁論²⁹⁾を私はそれぞれ翻訳した。だが、私はそれらの弁論を翻訳者としてではなく、あくまでも弁論家として訳した。つまり、内容は同じままで、その形を(ラテン語の)表現にすることで、我がローマ人の語用に合った表現を用いて翻訳したのである。その際、私は言葉の代わりに言葉を置き換えて³⁰⁾翻訳することが必要であると考えたのではなく、言葉の全体的な文体とその効力を保持した。なぜなら、私は読者にそれらの語を数えて伝えるのではなく、いわば重さを量って³¹⁾伝えるべきだと考えたからである。
- 15 私の労苦により達成されるであろうこと、それは、自身がアッティカ人であることを望む人々に何を要求すべきか、また、彼らをどんな言説の形に至らせるかを³²⁾、我々ローマ人が理解できるようになることである。だが、トゥーキューディデース³³⁾が立ち上がるのはだかるだろう、なぜなら彼の雄弁を賛嘆する者たちがいるからである。彼らの主張は正しい。が、トゥーキューディデースは我々が探し求めている弁論家とは何の関わりもない。歴史を語ることにより叙述することと、立証して告訴したり、逆に告訴に反駁することは別であるからである。物語を語っている時に聴き手の心をつかむのと、聴き手の心を動かすのは別のことである。「しかし、トゥーキューディデースは立派な
- 16 話し方をする。」が、果たしてプラトーンよりも立派にだろうか？我々が探し求めている弁論家は、教化する、楽しませる、感動させることに適した話し方で、公共広場で行われる討論を行わなければならない。そのため、もしトゥーキューディデースの話し方で公共広場にて演説していると自ら公言する者がいれば、この者は、政治や法的な事柄に従事しているという体裁からさえも隔たってしまうことになる³⁴⁾。しかし、もしその者がトゥーキューディデースを褒めるのなら、その者の意見に私のこの
- 17 考えを付け加えよう。どうだろう？あの神々しい作家プラトーンが著書『パイドロス(ラテン：パエドルス)』³⁵⁾で、ほぼ同時代のイーソクラテース³⁶⁾を、ソクラテースに素晴らしく褒めさせた。が、あらゆる知識人に最高の弁論家であると言わしめた、あのイーソクラテースでさえ、私は(最高の弁論家の)数のうちに入れないでいる。なぜなら、イーソクラテースは戦争にも従事していないし、鉄剣も持たなかったし、その弁論はあたかも木剣³⁷⁾で(敵の攻撃を)かわすようなものだったからである。だが、最高ランクの者と最低ランクの者を比較するために、非常に有名な剣闘士の二人組を私は紹介しよう。アイスキネースはここではアエセルニーヌスと例えられている。彼はルーキーリウスが言うような卑俗な人間ではなく、鋭敏で学識ある人物である。

「パキデイヤーヌスと対戦させられてきたこの者(アエセルニーヌス)こそ、

人類誕生以来、長きにわたり最良の剣闘士であった」³⁸⁾

- なぜなら、私はあの弁論家 (デーモステネース) よりも神々しい者は誰も思いつく
- 18 ことができないと考えるからである。この私の仕事には二種類の反論が対置される。一つは、「ギリシア人の方がより上手に行った³⁹⁾」という論である。だが、ギリシア人自身に (ギリシア語でよりも) ラテン語の方が上手にできることがあるかどうか、訊ねる者があるろうか？二つ目は、「なぜギリシア語の原文よりもこの (翻訳を) 読まねばならないのか？」という反論である。しかし、彼ら (ラテン翻訳に反論を行う者ら) は『アンドロス島の女⁴⁰⁾』と『青年同輩⁴¹⁾』を、同様に [メナンドロスよりもテレンティウスやカエキリウスを読み、] 『アンドロマケ (ラテン語：アンドロマカ)⁴²⁾』、『アンティオペ (ラテン語：アンティオパ)⁴³⁾』、『七将の息子たち⁴⁴⁾』といったラテン語訳を受け入れる。[彼らはエウリーピデースやソポクレスよりもむしろエンニウスやパークウィウスやアッキウスを読む。] 彼らがギリシア語をラテン語に翻訳した「詩」には嫌悪感を持たないのに、同じく翻訳した「弁論」には嫌悪感を持つなどという (おかしい) ことがあるだろうか？
- 19 だが、どのような訴訟が法廷へ持ち込まれるかまず説明する前に、これまで既に取り掛かってきたことに改めて今、我々は取り掛かろう。かつてアテーナイには以下の法律があった。<ある者が会計報告を行う前に、その者の在職中に栄冠を授与される、という市民の議決をいかなる者も行うべからず⁴⁵⁾>。また、別の法律<人民から (褒賞を) 授与された者は、民会で贈られるべし>、<元老院から授与された者は、元老院で贈られるべし>があった⁴⁶⁾。デーモステネースは (都市の) 防壁修復の監督者であったが、それを私費で修復した。このデーモステネースの件について、クテーシポーンが下した決議は、デーモステネースが会計報告を行うことなく、黄金の栄冠を授与されるべきであり、この授与は、劇場が法的な集会を行う場所ではないにもかかわらず、劇場で市民を集めて行われるべきである、というものであった。そして、<この者にはアテーナイ市民への功績と善行ゆえに褒賞が授与されるべし>という決議が下され
- 20 た。このクテーシポーンに対し、アイスキネースは法に違反して決議を下したとの廉で法廷への出頭を命じた。その罪状は、デーモステネースに会計報告を行わずに栄冠を受け、しかもそれを劇場で行ったばかりか、デーモステネースは善き人間でも国家にとって有益な者でもないのに、彼の功績と善行に関する陳述は誤っている、というものであった。このケースそのものは我が国の慣習的な裁判形式とは異なっているが、重要な例である。なぜなら、両義性を持つ (両方の側への) 法に関する十分に鋭い解釈
- 21 と、両者の国家功績に関する大変貴重な対比を含むからである。アイスキネースに対しては以下のような告発がなされた。使節職務を虚偽報告した⁴⁷⁾ 廉で、アイスキネース自身がデーモステネースに死罪を求刑された時⁴⁸⁾、アイスキネースはクテーシポーンに対する提訴を装い、デーモステネースの業績と評判について司法審査の対象としたが、それは論敵への恨みを晴らすための口実であった⁴⁹⁾。ので、アイスキネースはデ

一モステネースが会計報告をしなかったことについては、不誠実な市民であるのに最
 22 高の人と賛嘆されていることについてほど強くは攻撃しなかった。アイスキネースは
 マケドニアのフィリッポス（ラテン語：ピリッパス）が亡くなる四年前に、クテーシポ
 ーンに対してこれら多くの（処罰）を請求した。その訴訟はアレクサンドロス（ラテン
 語：アレクサンデル）がアジアを制圧した数年後に行われた⁵⁰⁾。その訴訟にはギリシア
 全土から人々が集まってきたと言われている。二人の最も偉大な弁論家が極めて重要
 な訴訟で、入念に準備したり、敵意を燃やして争っていたさまを見たり聞いたりする
 23 ことほど有益なことはあろうか。私の希望通り、彼らの長所の全てを適用しつつ彼らの
 弁論を翻訳するとしよう。つまり、我々の慣用的語法から外れない範囲で、その長所、
 つまり意味内容とその表現と、内容の順序と語彙に従いながら、もしこれら全てがギ
 リシア語の（逐語⁵¹⁾）訳でなければ、少なくともそれらが同じ種類のものであるよう
 尽力しよう。（この翻訳法が）アッティカ風の話し方を望む人々の弁論に合わせるため
 の基準となるだろう。さて、もう私自身については十分話してきた。次はいよいよ、
 アイスキネース自身がラテン語で話すのを聞こうではないか。

<訳文終わり>

.....
 【著者紹介】

高畑時子 (TAKAHATA Tokiko) ドイツ・マールブルク大学大学院 Ph.D、現職は日本学術振興会
 特別研究員 RPD・近畿大学等非常勤講師。修辞学および翻訳論専門。主な業績は、*Das Bild des
 römischen Staates in Ciceros philosophischen Schriften*, [http://archiv.ub.uni-marburg.de/diss/z2004/
 0622/](http://archiv.ub.uni-marburg.de/diss/z2004/0622/)。「第2章、修辞学・弁論」、『ラテン文学史』（ミネルヴァ書房、2008年：共著）など。連
 絡先：takahattt@gmail.com / takahatat@yahoo.co.jp

.....
 【註】

- 1) Plut. Cic. 41; Cic. Fam. 4,14,1; 4,14,3; Att. 12,32,1. (Cf. Abbott, F. F., *Commentary on Selected Letters of Cicero*: <http://www.perseus.tufts.edu/hopper/text?doc=Perseus:text:1999.04.0076>).
- 2) Cf. *Der Kleine Pauly, Lexikon der Antike*, Bd.1, München 1979, p. 1181.
- 3) 木曾明子 (2002)「デモステネースの雄弁—ディオニュシオスの耳」『西洋古典論集』第18号：p.2。
- 4) リューシアースは前445年、トゥーキューディデースは前460年生まれであるのに対し、デーモステネースは前384年と時代がより新しい。ので、キケローはリューシアースとトゥーキューディデースを初期のアッティカ派と見なしていると推察される。
- 5) 写本については、Hubbell (p.350~351), Nüßlein (p.8), Kroll (p.1102) が詳細に論じている。
- 6) デーモステネースは、結局、政敵アイスキネースをアテーナイから放逐した。この際に行った演説『冠について』(前330)はアッティカ弁論術の模範とされた。
- 7) 音楽の伴奏を伴う詩。

- 8) 酒神ディオニューソス讃歌。ディオニューソス祭などの祝祭で男性のコロスによって歌われた。
- 9) 三種の文体 (*genera elocutionis*), cf. Cic. *Inv.* 368 など。
- 10) “de re”. この *res* の字義的意味は「内容」であるが、ここではそれを「話法」と訳した。
- 11) Quintus Ennius (前 239～前 169)。ローマ共和政期の叙事詩人・劇作家。作品は悲劇、喜劇、ローマ史に題材を取ったプラエテクスタ劇 (*fabula praetexta*)、教訓詩、風刺詩、頌徳詩、エピグラムなど多岐にわたった。ローマ人にギリシア文化を伝えるよう努め続けた。代表作は、アエネアースがローマに辿り着いた時からエンニウスの時代までの全ローマ史を扱い、ローマ史をホメーロスの手法で歌った晩年の叙事詩『年代記』(*Annales*) 18 巻である (約 600 行の断片のみ現存)。ギリシア叙事詩の *dactylus hexameter* (ギリシア語：ダクトュロス・ヘクサメトロス) を初めてラテン詩に導入した。国民叙事詩の可能性を開拓し、「ラテン文学の父」と呼ばれて、その力強い荘重な文体は、キケローはもちろん本作品にも登場するパークウィウス、ルーキーリウス、アッキウスの他、ルクレーティウスにも影響を与え、とりわけウェルギリウスに大きな影響を与えた。
- 12) Marcus Pacuvius (前 220～前 132 頃)。共和政期のローマの悲劇詩人、Ennius の甥。前 200 年頃にローマにやって来て、Ennius に会い、後にその弟子となった。しかし主にエウリーピデースを拠り所としたエンニウスと異なり、様々な悲劇詩人の作品を題材とした。例えば、アイスキュロスからは『武器の裁判 (*Armorum iudicium*)』、ソポクレスからは『ヘルミオネー (ラテン語：ヘルミオナ, *Hermiona*)』、『足洗い (*Niptra*)』、エウリーピデースからは『アンティオペー (ラテン語：アンティオパ, *Antiopa*)』などを翻案した。後世ではパークウィウスは偉大な悲劇作家、また高尚な文体の模範とされた。その際、アッキウスと比して “doctus” と称された。作品では特に『アンティオペー (*Antiopa*)』、『デューロレステス (奴隷としてのオレステース, *Dulorestes*)』、『クリューセース (*Chryses*)』などが有名である (cf. Cic. *Lael.* 24; *Fin.* 5,63)。
- 13) Statius Caecilius (前 219 頃～前 168 頃)。Ennius と同世代人。ローマ共和政期の喜劇作家。プラウトゥスとは友人関係。主としてメナンドロスなどのギリシア新喜劇を翻案した。キケローは至る所でそのラテン語能力について言及している (cf. *Att.* 7,3,10; *Brut.* 258)。作品は、約 300 行の詩行およびその断片と 42 編の喜劇作品の題名が現存するのみ。
- 14) Publius Terentius Afer (前 190 頃～前 159)。ローマ共和政期の有名な喜劇詩人。メナンドロスやアポッロドーロスらのギリシア新喜劇を翻案・改作し、前 166 年～前 160 年の間に以下のイアンボス・トロカイオス脚による 6 篇を書き遺した。『アンドロス島の女 (*Andria*)』、『義母 (*Hecyra*)』、『自虐者 (*Heautontimorumenos*)』、『宦官 (*Eunuchus*)』、『ポルミオー (*Phormio*)』、『兄弟 (*Fratres*)』。これら翻案は、作品を継ぎ接ぎすることで台無しにしたという非難への反論を含み、作品の筋が原作よりも複雑化され、登場人物や状況が倍増している。プラウトゥスも後期の古代ギリシア喜劇を翻案したが、テレンティウスの喜劇はプラウトゥスのような爆発的な笑いを喚起するものではなく、メナンドロスの作品のような穏やかな性格と静かな状況を描写した。そのため、生前は知識人以外にはあまり受け入れられなかった。

が、死後はローマ国民の倫理観に合った人格描写、すぐれた感情表現、正しく自然なラテン語の語法、たとえ日常語を用いても軽妙かつ優雅で洗練された文体ゆえに評価され、キケローやカエサル等に影響を与えた。

- 15) Lucius Accius (前 170 頃～前 86 頃)。ローマ共和政期のローマの悲劇詩人でローマ史作家。法廷政治活動からは遠ざかっていた (cf. Quint. *Inst.* 5,13,43)。『テーレウス (*Tereus*)』、『クリューシッポス (ラテン語：クリューシップス, *Chrysippus*)』、『クリュタエムネーストラ (*Clytaemnestra*)』、『アイギストス (ラテン語：アエギストゥス, *Aegisthus*)』など、残虐な挿話を含むギリシア伝説を扱った悲劇を書いた。また、『武器の裁判 (*Armorum iudicium*)』、『テーレポス (ラテン語：テーレプス *Telephus*)』など、トロイア伝説から好んで題材を取った作品もある。彼の悲劇には概して、厳かなパトスを表し、時折過度の修辞技巧を駆使した伝統的な古代ローマの作風が見られる。彼の悲劇は約 50 篇あるが、そのうち大部分がエウリーピデースらギリシア悲劇詩人を模倣した作品である。現存するのはうち断片の約 700 行のみである。キケローは彼の悲劇を高く評価し、彼を “*gravis et ingeniosus poeta*” (*Planc.* 59) と評した。悲劇の他、ローマ史を主題としたプラエテクスタ劇なども書いた。
- 16) “Latine”. 関連語の “*Latinitas*” について以下の定義がある。“*Latinitas est, quae sermonem purum conservat, ab omni vitio remotum.*” 「ラテン語法とは、あらゆる欠点から逃れた純粋な語法を維持している語法のことである。」 (*Rhet. Her.* 4,17, cf. Nüßlein p.447). “*secutus sum non dico Caecilium (malus enim auctor latinitatis est), sed Terentium (cuius fabellae propter elegantiam sermonis putabantur a C. Laelio scribi)*” 「私が模範としたのはカエキリウスではない...、なぜなら彼はラテン語法の悪い権威だから。そうではなく、テレンティウスである。テレンティウスの劇は言葉遣いの優美さゆえにガーイウス・ラエリウスの作品であると考えられていた」 (*Cic. Att.* 7,3,10)。
- 17) Demosthenes (前 384 か前 383～前 322)。アテーナイの政治家で、アッティカの十大弁論家の最高峰と言われた。プラトーンやイーソクラテースの作品を学び、トゥーキューディデースの作品に出てくるアテーナイの偉人像に感銘を受けた。それが彼のアテーナイ支持の土台となった。法廷弁論の代作や雄弁術の教師として生計を立てつつ、自身が訓練をすることで弁論家としての弱点を補った。前 355 年頃から公的問題を扱うようになり、政治弁論家としても登場した。マケドニアのフィリッポス二世攻撃の演説を繰り返し行い、ギリシアの自由を守るためにアテーナイ市民の決起とアテーナイを盟主とする諸都市の団結を訴えた。演説の力でアテーナイのかつての敵テーバイとの同盟を成立させてマケドニアに決戦を挑んだが、前 338 年カイローネイアの戦いでフィリッポスに完敗した。前 336、フィリッポス二世の没後、ギリシアの自由回復を図ったが失敗し、亡命した。前 323、フィリッポス二世の後を継いだアレクサンドロス大王の没後、帰国して再度、反マケドニア運動を企てたが、ラミア戦争で敗れ、服毒死した。彼の作品は 61 篇現存するが、彼の真作かどうかは疑問視されているものも多い。彼の演説は、迫真の熱情と内容に沿った完成された文体により説得力が生み出され、特にリズムにも配慮されている。それはアッティカ散文の模範となり、キケローなど後代に影響を与えた。

- 18) Menander (前 342 頃～前 291 頃) はギリシア後期の新喜劇の代表的詩人。前 321 年に『怒り (Orge)』を上演して以来、生涯に 100 作以上の喜劇を書いたが、現存するのは断片を除き、『気むずかし屋 (Dyskolos)』、『調停裁判 (Epitrepontes)』、『髪を切られる女 (Perikeiromene)』、『サモスの女 (Samia)』のみ。彼の死後、ようやく彼の作品が一般に評価され、プラウトゥスとテレンティウスに少なくとも 8 篇は翻案されるなど、ローマ喜劇に大きく影響を与えた。さらにそのラテン作家らによる翻案を通じて、シェイクスピアなど近世以降のヨーロッパ劇にも影響を与えた。メナンドロスの作品は、アリストパネスをはじめとするアッティカ古喜劇が有した政治など国家社会への批判や攻撃性、風刺やパロディ風の表現などには乏しいが、洗練された文体と機知に富んだ会話、特に登場人物の性格描写に長けている。愛情や結婚、両親、子どもらなど日常的な題材を扱った喜劇に警句、教訓、皮肉、思いやりなどを随所に入れ、喜びや悲しみの心情を鮮やかに描写した。
- 19) Homerus (前 8 世紀頃) は高名なギリシアの叙事詩人。『イーリアス』と『オデュッセイア』の作者とされる。
- 20) 「格闘技訓練所の教師」“palaestritae” は、運動場へは試合に向けて練習するために行くのではなく、ただ練習するために行く (cf. Nüßlein, p.448)。
- 21) 原文は “Qui” で、Hubbell (p.361) はこれを “The prize-winners” と訳し、“palaestritae” を指していない。一方、Nüßlein (p.345) は “diese” つまり “palaestritae” を指し、Hubbell の解釈と異なる。
- 22) Lysias (前 445 頃～前 378 頃)。アッティカの十大弁論家の一人。法廷弁論代作者として生計を立てた。装飾のない簡素な文体を書くことに大変優れ、アッティカの日常語を芸術の域にまで洗練させた。古代には彼の作品とされたものが 425 編伝えられていたが、そのうち真作は 233 編だったとされ、現存するのはうち 34 編である (贋作を含む)。そのほとんどが法廷弁論で、職権乱用、軍事上の義務の不履行、没収された財産の違法な横領などを扱う。リュウシアースは既にヘレニズム時代に評価され、その文体は手本とされ (Cic. Brut. 286; Or. 226)、キケローらローマ人にも高く評価された。
- 23) Titus Annius Milo (前 95 頃～前 48)。ポンペイウスの部下としてカエサルの手下クローディウス (Publius Clodius) と争った。クローディウスは前 58 年に護民官に選ばれ、キケローを追放した人物である。しかし、ミローが前 57 年に護民官に選出されると、追放されていたキケローの召還に尽力した。ミローが前 52 年度の執政官職に立候補した際、クローディウスはそれを妨げた。そのため、両者は闘争し、前 52 年、ミローはクローディウスを暗殺し、その廉で訴えられた。この際、キケローはミローの弁護を試みたが、被告を見離していたポンペイウスがフォルムに配備した兵士らに脅威を覚えて慣れない状況で怯んでしまい、弁護に失敗した。『ミロー弁護 (Pro Milone)』はこの裁判の後に執筆され、現存する。
- 24) 「その者」とは、ローマの自称アッティカ派弁論家たちを指す。次の 11 節で初めて本作品に登場する。
- 25) Hubbell (p.363) は “by their own limited ability” と原文にない “limited” を入れており、本稿もその解釈に従う。

- 26)「我々ローマ人の誰もアッティカ風に話す者はいないと言う者」とは、メンミウス (Memmius, cf. Cic. *Brut.* 247) のような者を指すと推測される。メンミウスは文学に精通していたが、精通していたのはギリシア文学のみで、ラテン文学は軽視していた。
- 27) 原文は “nam si rideretur”. Hubbell (p.363) は “for if it was their wit which caused the jury to laugh” と訳し足している。
- 28) Aeschines (前 390 頃～前 315 頃) アテーナイの政治家でアッティカの十大弁論家の一人。前 351 年から行った『フィリッポス反駁』の 2 巻の終盤ですでにアイスキネースを厳しく批判した (cf. Nüßlein p.453)。前 348 年、アイスキネースはデーモステネースらとともに現状維持を基調とした平和条約を結ぶべく、マケドニア王フィリッポス二世への使節団の一人に選ばれた。が、この時親マケドニア派に転向したため、反マケドニア派のデーモステネースと激しく対立した。前 336 年にクテーシポーンが、大ディオニューシア祭を劇場で行う際、デーモステネースの戴冠式を行うことを提議した。この時に法律違反の廉でクテーシポーンを訴えて行われたのがアイスキネースの弁論『クテーシポーン弾劾』と、それに対するデーモステネースの『冠について』(または『クテーシポーン弁護』) である。裁判は前 330 年によく行われ、『クテーシポーン弾劾』と『冠について』も前 330 年に書かれた。アイスキネースの作品については、デーモステネース派との法廷闘争に関する演説が 3 編現存する。アイスキネースはこの法廷闘争に敗れ、アテーナイを去り、ロードス島で弁論術を教えた。
- アイスキネースの弁論については、ポティオスが以下のように記録している。「アイスキネースの弁論はいわば自然体で即興的であり、技巧よりは天性で人を驚嘆させるものである。…語法については平明でわかりやすく、構文についてはイソクラテスのように圧縮されて窮屈なところもない。勢いと迫力ではデモステネースにいささかも劣らない。文彩は思想と措辞のそれを使っているが、何か技巧をひけらかすためではなく、当面の論題の必要からである。それゆえ彼の話は繕わない印象を与え、大勢相手の弁論や私的な談話に非常に適している。というのは弁証的推論や説得的推論が。ぎっしり詰め込まれているわけではないからである。」ポティオス『書誌』写本 61,15～17 (木曾明子訳 (2012)『アイスキネース、弁論集』京都大学出版会 : p.351～352)。
- 29) アイスキネースの弁論『クテーシポーン弾劾』と、それに対して行われたデーモステネースの『冠について』(または『クテーシポーン弁護』) を指す。
- 30) 原文は、“verbum pro verbo” 「一語一対応」。
- 31) Nüßlein (p.451) は “adnumerare” を「(小さな硬貨のように) 数えて」と、“appendere” は「(地金のように) 重さを量って」と注釈を付けている。
- 32) Nüßlein (p.349) は、「どんな弁論の基準をこれに当てはめることができるかを」と意味対応訳している。
- 33) Thucydides (前 460 頃～前 400 頃)。ギリシアの歴史家。ペロポネネソス戦争 (前 431～前 404 年) を主題とした『歴史 (*Historiai*)』(8 巻、未完) の作者。内容を脚色して読者を楽しませることよりも、歴史を史実の通りできるだけ正確に、偏見なく客観的に伝えるよう尽

力した。その際、政治と軍事、戦争の歴史を、実地に赴くなどして調査し、極力、中立の立場から批判的に叙述した。歴史を作るのが人間である以上、同じようなことが繰り返されるため、悲劇的な出来事の結果などを後代に伝えようとした。その際、予測不能な危機的状況や不可避な出来事に対し人がいかに決断し対処したかや、窮地に立った人間の心理などを克明に描き出した。この『歴史』では、諸国の第一人者により戦地や民会などで行われた弁論が、その論敵が行った弁論と対比されているのが所々見られる。その文体は荘重かつ難解で、独特の言い回しが多く、一つ一つの文章も長い傾向がある。その文体についてキケローは、重厚であるが、難解すぎて公的活動の弁論には援用できない、と評している (cf. *Or.* 30~32)。

- 34) この箇所を Hubbell (p.367) は、「その者は政治や法的な事柄に関する知識は少しも持たない、と身を持って示していることになる」と意味対応訳している。
- 35) Cf. Plato, *Phdr.* 278e~279b.
- 36) Isocrates (前 436~前 338)。アテーナイの弁論家、かつ修辞学者で政治評論家でもあった。アッティカの十大弁論家の一人。弁論術の教師で、ゴルギアースやソフィストらから学んだ後、法廷弁論の代作を行っていた。前 392 年頃には、アテーナイに修辞学校を開き、亡くなるまでその長にあった。そこでは修辞学の教育に当たり、アイスキネースやリュクルゴスなど多くの著名な政治家や弁論家を輩出した。著作は、『オリンピア大祭演説 (*Panegyrikos*)』(前 380 年)、『パンアテーナイア祭演説 (*Panathenaios*)』(前 339)、『フィリッポス (*Philippos*)』など 21 編の演説と、9 編の書簡が現存するが、書簡のうち 4 編がイーソクラテースの真作かどうか疑問視されている。時に冗長ではあるが修辞技巧を凝らした華麗で流暢な彼の完成された文体は、ギリシア散文の模範としてキケローを通じ近代に至るまで西欧文化に影響を及ぼした。
- 37) 木剣は、剣闘士や兵士の剣の練習に使われた。イーソクラテースは生来、病弱で声が小さく、内気でもあったので演壇に立つのを控えた。彼は弁論を他人のために書き、それは彼の門下生らの手本となった。彼のほとんどの弁論は読むために書かれた。
- 38) ルーキーリウス (Gaius Lucilius, 前 180 頃~前 102 頃) 著『風刺詩』(4,151~154) からの引用であるが、引用文は一部変えてある。全文は、

Aeserninus fuit Flaccorum munere quidam

Samnis, spurcus homo, vita illa dignus locoque.

Cum Pacideiano componitur, optimus multo

Post homines natos gladiator qui fuit unus.

「フラックス家が開催した (剣闘士の) 試合に、あるアエセルニア (Samnium の町) の民、すなわちサムニウムの者が参加した。卑しい人間で、その生き方とその身分にふさわしき者であった。パキデイヤーヌスと対戦させられてきたこの者 (アエセルニーヌス) だけが、人類誕生以来、断然、最良の剣闘士であった」

ここでは、アエセルニーヌスがアイスキネースに、パキデイヤーヌスがデーモステネースに例えられている。Nüßlein (p.452) によると、アエセルニーヌスは無敵の剣闘士として有

名であり、パキデイヤーヌも彼と同じ位強かった。古代では、強さで互角の剣闘士を戦わせることが重視された。

- 39) つまり、ラテン語の訳文よりもギリシア語原文の方がより良いということ。
- 40) *Andria*, テレンティウス (Publius Terentius Afer) の喜劇。メナンドロスの *Andria* と *Perinthia* が下地となっている。
- 41) *Synephebi*, カエキリウス (Staius Caecilius) の喜劇。メナンドロスの喜劇の翻案。Cic. *Fin.* 1,4 でも言及されている。
- 42) *Andromacha*, エンニウス (Quintus Ennius) の悲劇。エウリーピデースに同名の悲劇『アンドロマケー』がある。
- 43) *Antiopa*, パークウィウス (Pacuvius) の最も有名な悲劇。オリジナルはエウリーピデース『アンティオペー』。
- 44) *Epigoni*, アッキウス (Lucius Accius) の翻訳作品。アイスキュロスによる同名の悲劇のラテン語訳。
- 45) この法律について「執務審査を終えないうちは、審査未了 (の公職) 者に授冠してはならないと規定している法律」とのデーモステネースの『冠について』に関する別伝解説と、「デーモステネースは公職にあり、まだ会計報告を出していないため執務審査未了者であるが、法律は執務審査未了者への授冠を禁じていると申し立てた」とのリバニオスの概説がある (cf. 木曾明子訳 (2010)『デーモステネース、弁論集 2』京都大学出版会 : p.173 と 175)。
- 46) リバニオスによる概説に「彼 (デーモステネースの政敵アイスキネース) はまた、アテナイ民会が誰かに授冠するときは民会場で、政務審議会が授冠するときは政務審議会議事堂で授冠が布告されねばならず、それ以外のどこであってもならない、と命じている法律を提示した」との説明がある (cf.『デーモステネース、弁論集 2』 p.173)。
- 47) 使節職務の不履行や虚偽報告 (指示通りに行わなかったなど)。
- 48) 前 343 年に行われた。アイスキネースとデーモステネース双方の弁論が現存している。
- 49) 直訳は、「敵に復讐するため、クテーシポーンの名のもとにデーモステネースの業績と評判について裁判が行われた。」
- 50) アイスキネースがクテーシポーンを告訴したのは前 336 年で、裁判は前 330 年に行われたのであるから、この箇所の記述の通りであると、フィリッポス二世が亡くなったのは前 340 年ということになる。が、実際にフィリッポス二世が殺害されたのはこの訴訟の後、間もなくの前 336 年であった。従って、この箇所の記述は誤りである。この点について、Nüßlein (p.454) はデーモステネースが前 340 年と前 339 年にすでに黄金の栄冠を授与されて顕彰されていたからではないかと推測している。
- 51) Hubbel (p.373) は “if all the words are not literal translation of the Greek” と “literal” を付加して訳しているため、ここではそれを参考にした。

【参考文献】

訳文、解説、注釈等、本稿の全体にわたり参考にしたもの：

- Hubbell, H. M. (1993). *Cicero, De inventione, De optimo genere oratorum, Topica*, Cambridge, etc.: Harvard University Press, Loeb Classical Library. (Original work published 1949)
- Hrsg. und übers. von Nüßlein, T. (1998). *M. Tullius Cicero, De inventione, Über die Auffindung des Stoffes; De optimo genere oratorum, Über die beste Gattung von Rednern*, Düsseldorf, usw.: Sammlung Tusculum.
- その他参考文献 :
- Büchner, K. (1964). *Cicero, Bestand und Wandel seiner gestigen Welt*, Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag.
- Dihle, A. (1955). Ein Spurius unter den rhetorischen Werken Ciceros, *Hermes*, 83: 303-314.
- Häfner, S. (1928). *Die literarischen Pläne Ciceros*, Diss. München.
- Hendrickson, G. L. (1926). Cicero De optimo genere oratorum, *American Journal of Philology*, 47: 109-123.
- Kroll, W. (1948). *Paulys Real-Encyclopädie der classischen Alterthumswissenschaft (RE)*, Neue Bearbeitung, Zweite Reihe, 14 1/2 Bd., erste Hälfte, Sp.1102.
- Mitchell, T. N. (1991). *Cicero, The senior statesman*, New Haven and London: Yale University Press.
- Peterson, T. (1963). *Cicero, A Biography*, New York: Biblo and Tannen.
- Ziegler, K. und Sontheimer, W. (1979). *Der Kleine Pauly, Lexikon der Antike*, Bd. 1~5, München: Deutscher Taschenbuch Verlag.